

## 三瓶自然館における学校団体利用推進プロジェクトについて

星野由美子\*・松本恭子\*・葭矢崇司\*・大國陽子\*

### Project of the school programs at The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe

Yumiko Hoshino, Kyoko Matsumoto, Takashi Yoshiya and Youko Ooguni

#### 1. はじめに

鳥根県立三瓶自然館は、鳥根県における自然系博物館として位置づけられており、平成15年より博物館相当施設として登録されている。博物館とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する様々な資料を収集、保管、展示することによって、利用者の教養の向上や調査研究等に資するとともに、資料の調査研究等を行う施設のことである（博物館法第2条より）。また、博物館相当施設とは博物館の事業に類する事業を行う施設として、当該博物館の所在する教育委員会が指定した施設をいう。よって、当館で有するさまざまな資産を、来館者に供することは重要な使命の一つである。特に、学校団体等への学習利用の場を提供することはその使命を全うするための重要な機会であるとともに、入館者増につながるものと考えている。

そこで、当館では学校団体等の学習を含めた各種の利用を推進するために、平成21年度からプロジェクトチームを編成し、さまざまな取り組みを行った。プロジェクトチームでは、学校団体等の利用状況の分析、学校団体の要望に関する情報収集、必要とされている学習プログラム等の開発、既存プログラムの紹介、利用団体へのフィードバックなどを行った。

本報告では、主に学校利用の現状についての分析および平成21年度に重点的に取り組んだ内容について紹介する。

#### 2. チーム編成と基本方針

本チームは、企画情報課企画員1名、アテンダント1名、学芸課研究員2名で編成された。プロジェクトチームは図1のような基本方針を下に活動を行った。

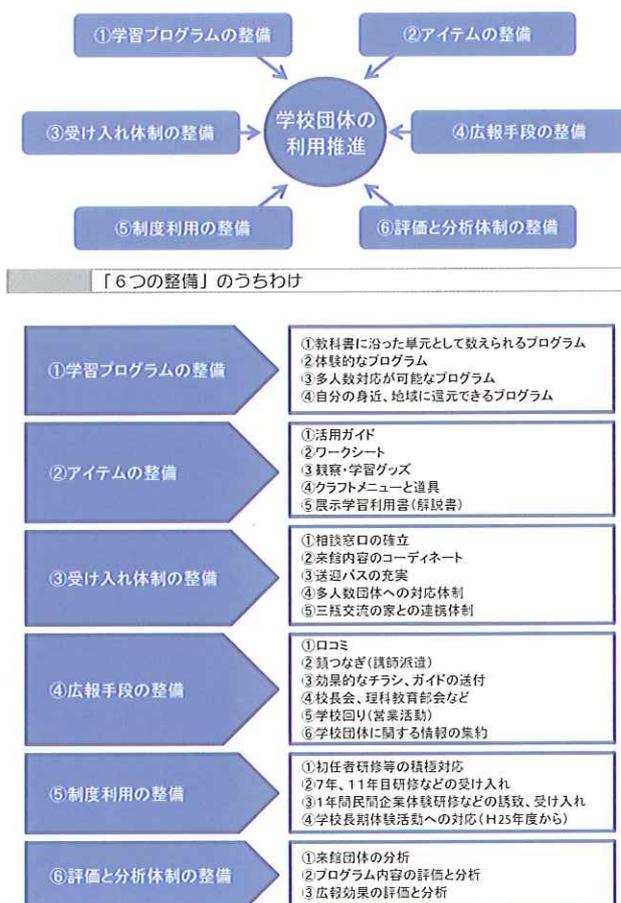


図1

#### 3. 学校団体利用の現状と課題

三瓶自然館の入館者数は、過去4年間で約12～14万人を推移している。そのうち、有料入館者数は、その約半数となっている(図2)。このうち、幼稚園、保育園、各種学校、公民館等教育関係団体の利用は、約2～3割を占めている(図3)。

\*鳥根県立三瓶自然館、〒694-0003 鳥根県大田市三瓶町多根1121-8

The Shimane Nature Museum of Mt. Sanbe (Sahimel), 1121-8, Tane, Sanbe-cho, Ohda, Shimane, 694-0003, Japan

この中で最も多くの団体数を占めるのは小学校であった(図4)。また、最も多くの人数を占めるのは中学校で(図5)、過去5年間の内最大利用人数は7,000人を超える年もあった(図6)。

このことは、小学校の利用は、一団体あたりの人数が少ない小規模校やクラス単位での利用が多く、中学校の利用は一団体あたりの人数が多い傾向があることを示している。

また、小学校および中学校の地域別利用者数は図7、8のようになっており、中学校は圧倒的に広島県の利用が多いことが判った。利用目的について調べてみると、広島県からの学校は宿泊研修が多く、島根県

からは遠足や授業の一環としての来館が占めている(図9)。

これらのことから、広島県の利用については、100名を超える中学校の宿泊研修利用が多く、島根県からは遠足や授業の一環として、少人数単位での小学校利用が多くを占めていることが判る。

しかしながら、広島県内の中学校利用数については、平成19年度をピークに減少している。これは、広島県内における中学生の宿泊研修の実施方法が表1のように変更されたことが原因の一つと考えられる。これらの変更は平成18年度からが移行期間となっており、平成19年度は同一校の異なる学年が時期をずらし

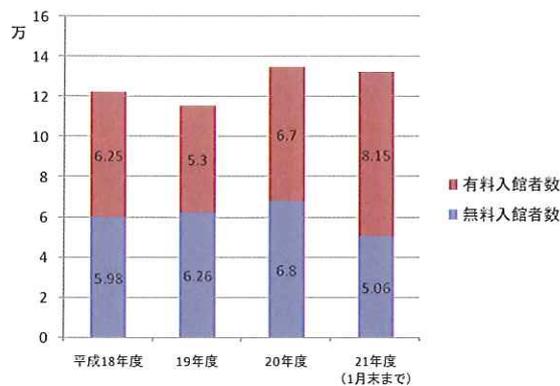


図2 三瓶自然館の入館者推移

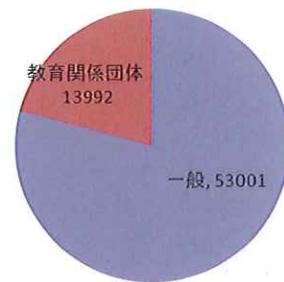


図3 三瓶自然館の有料入館者における教育関係団体の占める割合 (平成20年度)

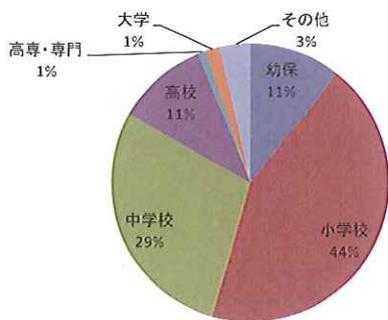


図4 学校団体利用種別 (平成20年度)

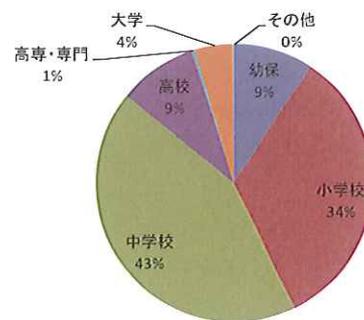


図5 学校種別による入館者数うちわけ (平成20年度)

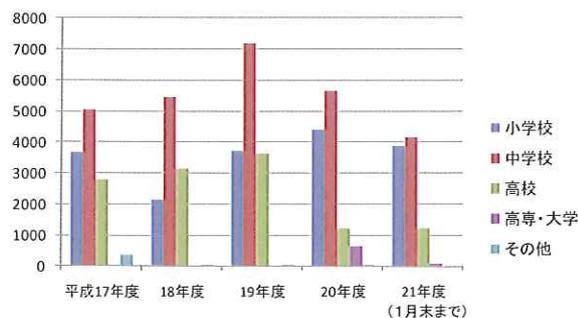


図6 学校別入館者数の変化 (複数回の入館を含む)

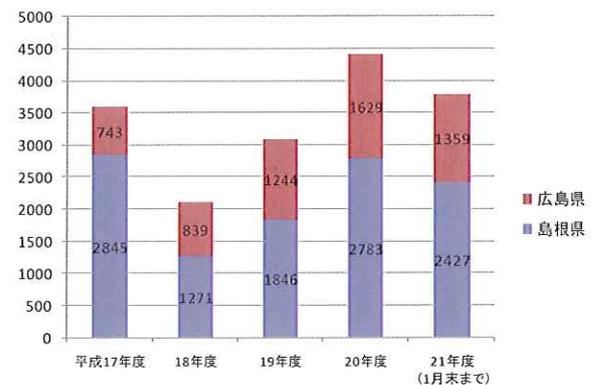


図7 小学校入館者実数の地域別変化

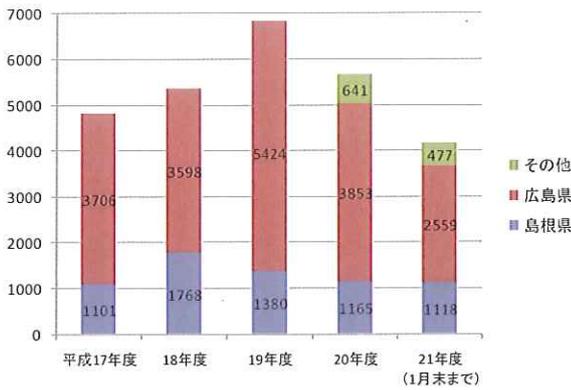


図8 中学校入館者実数の地域別変化

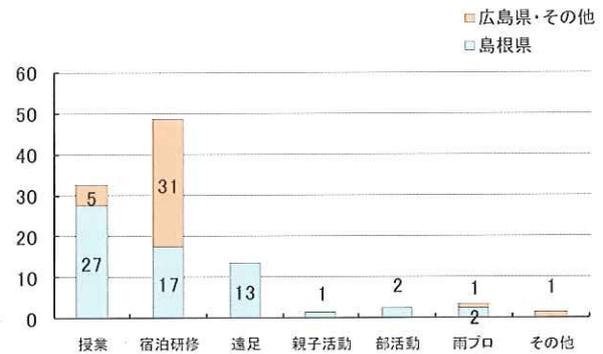


図9 利用目的 (平成21年度)

て訪れることもあったことが一時的な大幅な利用の増加につながっている理由と考えられる。また、研修期間の短縮は、遠方への移動時間を短くし、実質的な研修時間を確保する動きにつながっている。さらに、バスの借用にかかる費用などの経費削減も行われ、県外での宿泊研修を計画しにくい状況が学校側にあり、三瓶山への広島県内の学校団体の誘致が困難な状況になっているといえる。

表1 広島県内の公立中学校の宿泊研修の主な変更点

	実施学年	期間
平成21年度以前	2学年	3泊4日
平成21年度以降	1学年	2泊3日
変更に伴う影響	準備期間がない	移動時間を短く

※移行期間が平成18～20年度の3カ年

そこで、平成23年度の施行にむけて準備されている小学5年生を対象とした3～5泊程度の「学校長期自然体験活動」や授業等における利用をターゲットとして、今後のプログラム作りやPR方法などを検討していく必要があると思われる。

#### 4. 学習プログラムの重点整備とその結果

三瓶自然館は、野外の自然そのものも展示物として位置づけ、そこからさまざまなことを学べる「自然とふれあうプログラム」を各分野において整備してきた。さらに、小学校での教育課程において、当館が有する専門性や展示などを有効に利活用してもらえるようプログラム整備を行っている。プログラムの実施そのものは、以前より学校からの依頼等を受けて、個別に行ってきたものもあるが、平成21年度は、それらをまとめて広報するなどの周知にも取り組んだ。

#### (1) 教科書に沿った学習プログラムについて

特に小学校における教育課程においては、全教科をひとりの教員が指導することになっており、学習指導に困難を感じる科目や分野も少なくない。

そこで、平成21年度は下記の分野において重点的な内容整備と広報を行った。実施状況は以下のとおり。

##### ①小学6年生「地層の学習」

火山灰や堆積によってできた地層のなりたちについて、現地で実物を観察できる学習プログラムを実施した。

地層の学習においては、学校の近隣で地層を観察できる露頭を確保することが困難であることが多いが、当館の近くでは、約10万年前から3,700年前まで活動した三瓶火山の噴火によって形成された良好な火山灰堆積層の露頭が観察できる。このような素材を用いて研究員による地層の形成過程や年代測定など、専門的な内容や新しい知見をわかりやすく解説した。また、当館所有のバスによって現地への移動手段を確保するなど、充実した体制を提供できた。

##### ②小学4年生「星の学習」

星座や星の動きなどの「星の学習」について、プラネタリウムを用いた学習プログラムを実施した。

星の動きや星座早見の使い方などは、授業では説明が難しく、また、夜間に実際の星空を観察して学習する機会を作ることは困難であるため、教員からのニーズが高い。そこで、日中でも星座や星の動きについて学習が可能なプラネタリウムを活用して、学習プログラムを提供した。

星座についての学習は、特に星座早見を用いて、その使い方や実際の星座の観察の仕方を学べるプログラムとした。また、星の動きの学習においては、自由に星の動きを制御できるプラネタリウムの特徴

を活かし、季節や時間に限定されない星空の観察を行った。

(2) 実施状況について

①および②の学習プログラムの利用状況は図10のとおりである。地層学習および星座学習は、これまでも平成18・19年度には地層学習について、平成18年度には星の学習について、それぞれ分野ごとに、重点的な広報を行ってきた成果が表われている。

反対に、特に重点広報を行わなかった年度のプログラム利用は減少しているものと思われる。

よって、学習を担当する教員が変わっていく小学校等については、今後も毎年積極的な広報を実施し、利用を促すようにしていくとともに、新たなプログラム開発や利用状況の検討も行っていく必要があると思われる。

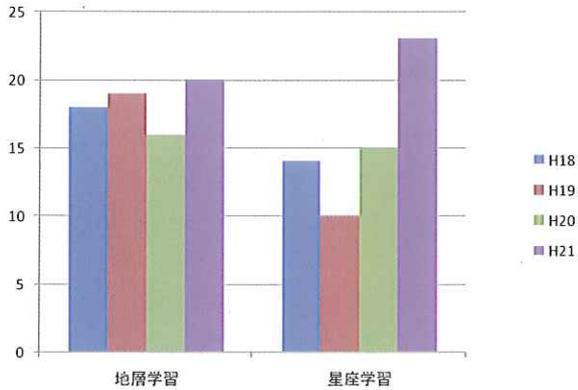


図10 重点プログラムの利用状況

5. 利用推進のための重点取り組み

さまざまな場面における学校団体の受け入れ体制の強化を図る目的で(1)～(4)の取り組みを行った。以前から取り組んでいることもあるが、新しく実施していることもあり、検証は平成22年度以降に行っていく予定である。

(1) アイテムの整備

学習や見学、観察の効果を高めるためのセルフ学習系のアイテムを整備した。以前より使われていた館内のワークシートについては、見直し作業を行った。

①活用ガイドの作成

学習利用の検討材料として、当館が提供する各種プログラムをわかりやすくまとめた資料を作成した。また、平成22年度からは毎年の休館日や企画展に合わせた入館料の変更を反映させるために年度版

で作成することとした。

②ワークシートの改定と新規作成

a. 館内ワークシートの改定

常設展示用ワークシート「サヒメル発見シート」は、小学生向け48種類と中学生向け47種類がある。それぞれ地元学校教員との連携により平成14年度と15年度に作成したが、展示更新などによって使用できないシートが増えたため、改訂作業を行った。

b. スタンプラリーの作成

主に未就学児、小学校低学年児童を対象に、館内に設置したスタンプポイントを探すワクワク感を持ちながら展示見学できるアイテムとして作成した。スタンプシートは簡単な切り折りで本のかたちになるデザインとし、小さな子どもが持ち歩きやすいよう配慮した。また、展示に関する一言コメントも載せ、学ぶための要素も盛り込むよう心がけた。

c. 野外での自然観察セルフガイドシートの作成

三瓶自然館は、野外に広がる国立公園の自然も展示の一部と見なし、自然環境と一体となった事業を展開している。職員が指導する自然体験プログラムに加え、一人ひとりが自分のペースで観察に取り組むためのセルフガイドシートを作成した。これは附属施設ふれあいの里奥出雲公園の園内用に開発されたものを、同園の休園に伴い、館周辺で使用できるよう改訂したものである。

(2) 受け入れ体制の整備

① 相談窓口の確立

学習計画をたてる教員にとって、利用に対してのハードルを下げ、満足度を上げることを目的として、学校団体の利用目的に合わせた受入相談ができるよう窓口の確立を試みた。

内容としては、要望の聞き取りや来館プログラムのコーディネート、視察対応などである。打合せは電話でのやりとりが中心であるが、窓口担当不在時は学校側に迅速な対応ができないことがあった。そこで、打合せの進捗状況が館の職員間で確実に周知されるよう、来館予定の学校名と打合せ状況を事務所内に掲示するなどした。

② 無料送迎バス運行の充実

当館に来館を検討する中でハードルとなることの一つに、中山間地にあるため公共交通機関を活用しにくいことがある。そのため、バスをチャーターする経費確保などの理由により来館が困難となってい

る学校が多い。当館では、以前より学校団体の便宜と積極的な誘致を図るため、施設から片道1時間圏内にあたる大田市・飯南町・美郷町の全域、出雲市・雲南市の一部を送迎範囲として、無料送迎バス(29人乗りマイクロバス)を運行しているが、十分な周知が行われていなかった。

そこで、平成21年度には、送迎範囲内の学校をホームページ上で公表するなどして周知に努めるとともに、より希望に即した運行ができるよう、従来の兼務運転士6名に加え、委託運転士1名を増員して受け入れ態勢を強化した。

### ③ 三瓶青少年交流の家との連携

利用団体の滞在期間は図11にあるように、日帰りが全体の4割、宿泊が6割を占めている。宿泊研修において研修会場として利用されているのは、主に当館から800mほどの距離にある国立三瓶青少年交流の家(以下、交流の家)であるが、これまでは個別のプログラム作成やPRが多く、情報の共有や連携に課題があった。

そこで、とくに広報活動において下記のような内容について連携して実施した。

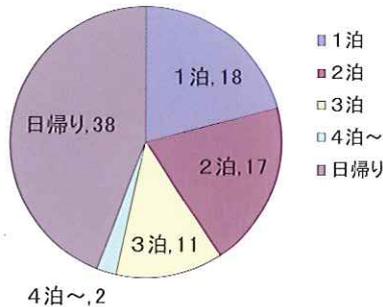


図11 三瓶での滞在期間(平成21年度アンケート結果)

#### a. 広島方面学校訪問PR

当館職員が学校を訪問するにあたり、事前に交流の家で行われている学校向けプログラムについて交流の家職員より説明を受ける場面を設定した。また、学校訪問の際は、交流の家の資料を持参し、宿泊研修会場として積極的にPRを実施した。また、当館で聞き取った各学校の情報を共有した。

#### b. 県内小学校PR

日程が調整できる範囲で、両施設の職員が一緒にPRにまわった。

#### c. 教員対象プログラム体験

夏休み期間中に小学校教員を対象とした学習プログラム体験会を連携して実施した。

## 6. 広報手段の新規整備

当チームとしては、学校向けの様々な広報を実施したが、ここでは特に新しく取り組んだ内容を紹介する。

### (1) 来館校へのお礼状と次回プログラムのご案内

アテンダントの協力を得て、来館後に学校(大規模校は担当者)宛てにお礼状を発送している。コメントだけでなく、次回の参考となるように、来館した際の利用プログラムを検討しながら、7種類のプログラムの中から1つを選び、ハガキに添付している。

### (2) プログラム体験会

平成21年度は教員を対象として小学6年生向けの地層学習および小学4年生向けの星の学習についての学習プログラムの体験会を実施した。

### (3) 学校団体の意向に関する情報収集

#### ① アンケートの実施

来館受付時のアンケート配布を6月から実施した。

現在の回答率は70%であるが、三瓶滞在の実態把握や各種プログラムに対する意見、来館の決定時期や、来館の目的などの情報収集手段として有効であり、今後とも実施を継続する予定である。

#### ② 聞き取り

学校訪問PRの際に、教員の状況や館への要望等を聞き取り、プログラムの整備等に活用している。

## 7. ま と め

今回の報告では以前からの入館者データを活用した学校利用状況分析によって中学校利用の減少、小学校利用の増加などが明らかとなった。また、中学校は宿泊研修、小学校は遠足や授業など、それぞれの利用目的や来館するための課題なども明らかになった。

学校団体利用推進プロジェクトチームは、平成21年度よりスタートして、まだ1年目のプロジェクトであり、学校情報の収集や有機的な運用を継続するとともに今後もプログラム開発、学校への情報提供をさらに深めていきたいと考える。